

# 川平保護水面調査※

村越正慶、勝俣垂生、佐久本英珍、新垣盛敬 ※※

本調査結果は「昭和56年度川平保護水面調査報告書」で報告したので概要にとどめる。

## 1. 目的および内容

川平保護水面での保護対象種は、シャコガイ（全種）、クロチョウガイ、ゴシキエビ、ニシキエビ、フトミゾエビ、シラヒゲウニおよびカタメンキリンサイである。本事業は、これらの有用貝類と、その他の増殖対象水産動植物を保護することによって、それらの資源の増大を図ることを目的としている。上記の保護対象種の中で、特にシャコガイ類は、サンゴ礁浅海域に生息する沖縄県での重要な食用二枚貝であるが、最も美味とされるヒメジャコ (*Tridacna crocea*) を中心として、近年その需要が多く資源の減少傾向が著しい。またカタメンキリンサイ (*Eucheuma gelatinae*) は最近食品工業用の天然原料として用途が広がりつつある貴重な水産資源である。そこで、調査はヒメジャコとカタメンキリンサイに関連したことを中心に行なった。

昭和56年度はヒメジャコについては生息状況、生殖巣部重量、成長量そして放流効果の各調査と種苗生産に関する試験を行なった。カタメンキリンサイは生息状況調査と移植実験を実施した。また粒度組成と底生生物及び水質等環境調査は例年と同様におこなった。

## 2. 調査結果の要約

(1) ヒメジャコの生息状況は、湾奥から湾央ではほとんど観察されなかったが、湾口と礁原部でよく見られた。前回（昭和50年）と今回の調査結果から、保護水面設定効果はあったと言える。

(2) ヒメジャコの生殖巣部重量比は、5月が最も高く、9月には低くなった。例年と比較すると最高比の出現月が変わると共に平均重量比も低く同一傾向ではなかった。

(3) ヒメジャコの川平湾定点での成長量は穿孔生息長径値で1.23～6.38cmの範囲では、年間平均成長量1.61～1.84cmとほぼ等成長を示した。また1.05～1.40cmのものが5.85～7.00cmの範囲に成長するには3年間を要した。

(4) ヒメジャコの放流効果調査では、放流サイズの問題は残るが、「埋め込み」法で放流後約3ヶ月を経過して残存した個体は、その後8ヶ月を経過してもほとんど残っていた。殻長0.25～0.5cmの稚貝の「埋め込み」と「地まき」の折衷の放流方法では、約3ヶ月後のその残存率は、0.5～18.7%であった。

(5) ヒメジャコの種苗生産に関する試験では、今年度は7月14日に母貝4個体を用いて切り出しーアンモニア処理法で採卵した。得られたD状浮遊仔貝は28万個体であり、500ℓ水槽を3基使用

※ 水産資源保護対策事業

※※ 現在の所属：県漁業者センター

